八犬傳 其之廿四 函館戦記

隅田古雄編

楊洲周延畫

錦壽堂木作梓

A539

戊辰役 函館戦記

上の巻

古雄よし〳〵 閑迂画

〈48-2906〉

戊辰の役と云ふ今を去ること十有餘年明治元年の秋も早や夾残過ぐる八月下旬旧幕旗下の面々は先東都を脱走あし、北海道へ渡島より渡りて、政府へ願意を貫んとし思ふ折しも征討の命あり抗ひ官兵と風雨霜雪危険の別なく、數旬の戦記も漸く〳〵一々年月時日かく、彼地の景況いと悉しく、児童衆にも分解よく、綴りて呉との板主の依頼ふ盛舘戦記と外題表標[illegible]ふ三冊の讀切めて、其顚末を確明ふ、色艶をもつてさつねり記せし物ゆへ親容の堅くるしいと見給はんも其實録を是と取〳〵、江湖の諸君の、御高評被希うと、告條めてと序文と記す、

隅田了古述

荒井郁之助

榎本釜次郎

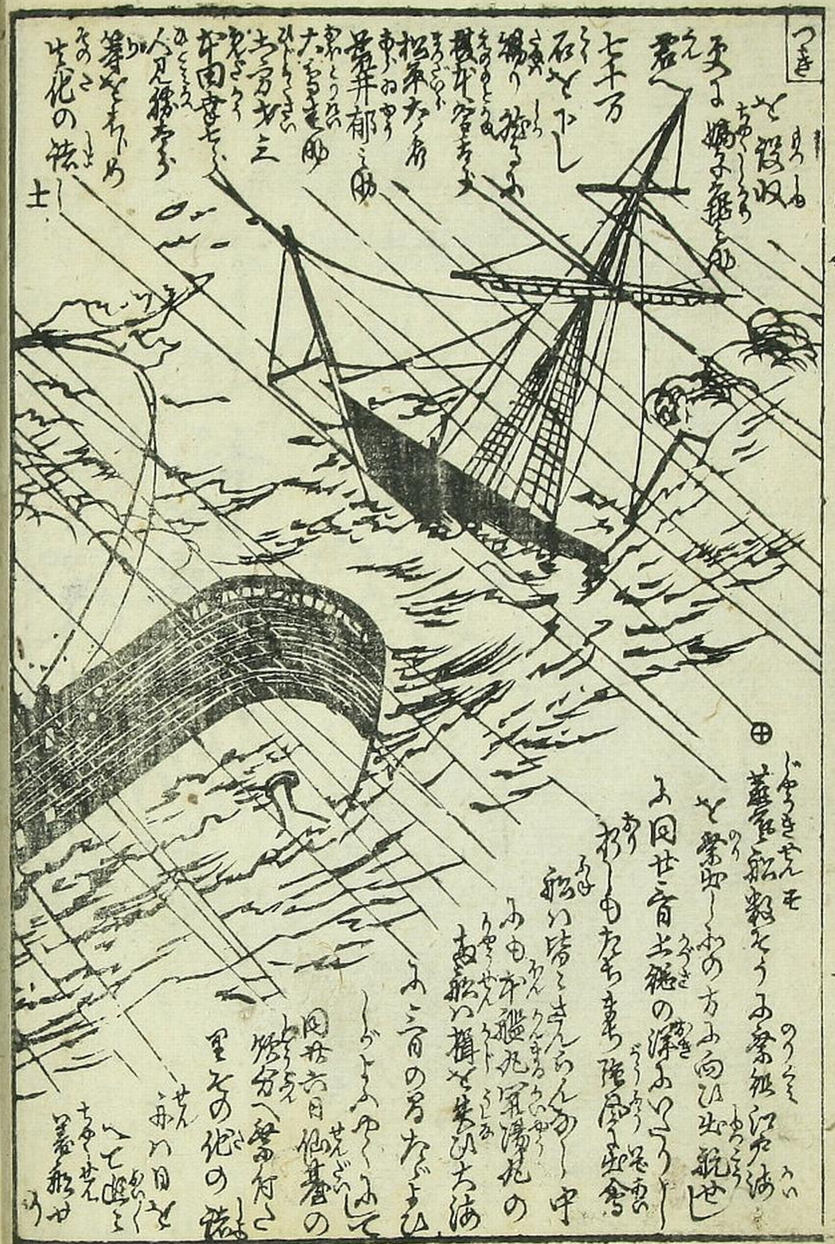
家の集
蒸汽
山人の旅

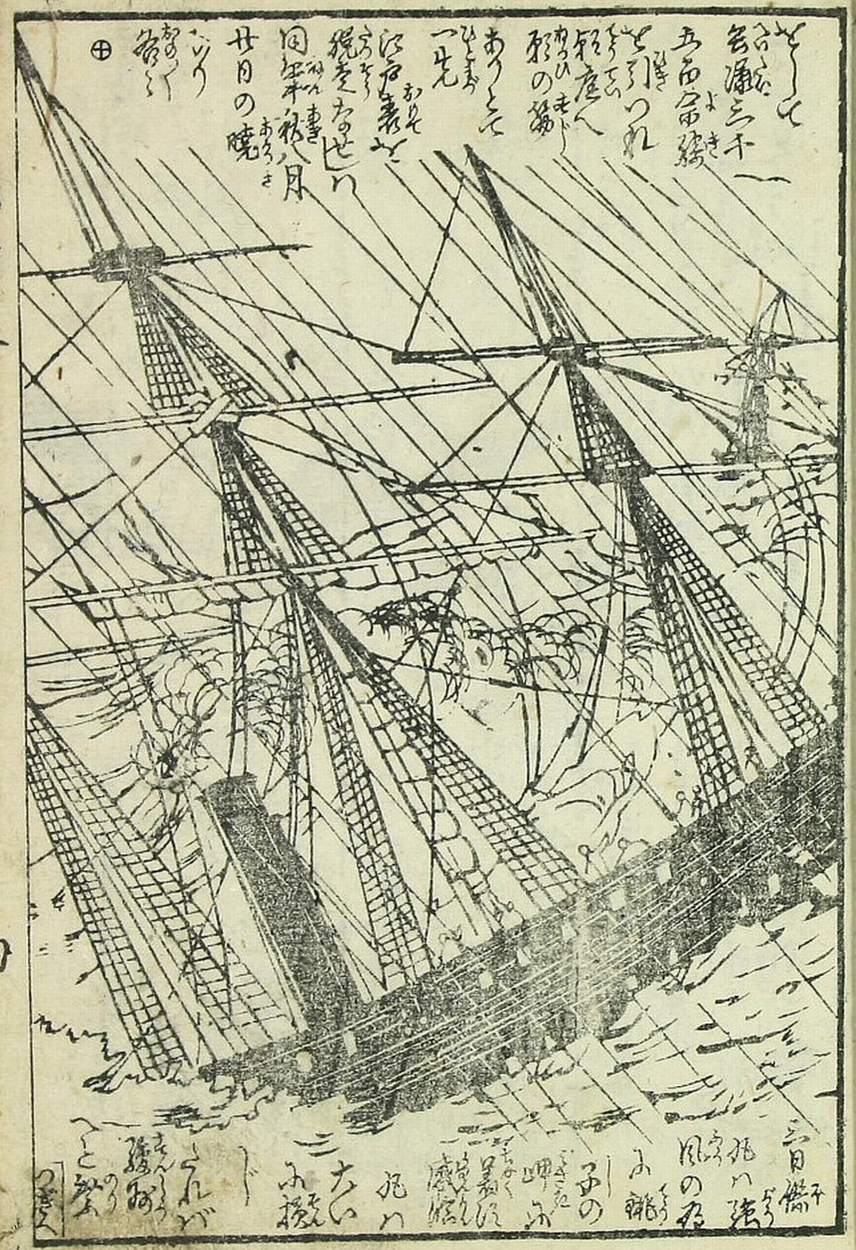
大鳥圭介

松平太郎

元和年なよう明治元年
浅原正月ふるまで家康
公東二百有餘年のる徳川
家の権威ぢうくとして
幕軍の四代なりしも時の
将軍慶喜公へ時勢を
斗うて自ら将軍職を
辞しみひてより政ち
てふ政ふるよ及び慶喜公
と諮め生化の業く
勤王をとふへし佐云
と敵よ出城江戸
ふおあて国幕府の
徒士と戦ひ打破り
勝ふふ来玉い
ふ江戸の
ふたいと
ちぐ
戦ひしが
残よ事ま

▲ハお祝ふれ慶喜公を初め
徳川家の
城の御よう
ちうく
と実来さて
ちうく
千代田
慶喜公へ
全んど江戸
きんしんありしが
徳川家の
四度至も
お月旧
八石
万石
次へ





つき

まさに四九月みそり
軍場、四天幡そゞめ
九そうの船いさ風沢
及び五名渡み修治
諸船の破損をつくろひ
いそしが如く兵士越後の
軍会者渡のくさんのる
ようにひとこゝだれ
今度は弘んど落城ふしと
仏書土如来のまつ
しく
つの旗よろこんなり
家内は野営まゝ
旅しく陣営まゝ
の渡み修治
諸船を修ふして時
号令は弘んど落城ふしと
仏書土如来のまつ
しく

大鳥圭介

狂言源太ふる妻らと姫あ
そのこゝろ
手花ふこゝろ
者共己よ
進進

拵
こゝろ
ふこゝろ
大ふる妻
ひとこゝろ
三ふこゝろ
闇
こゝろ
ふこゝろ
ふこゝろ
ふこ

つゞき

▲ふ向ひたる馬上の大將は武藏長
尾景勝の軍師直江山城守兼續
公なり

大岡用次郎

十五樓部みてハ徳川旗
本の一番の兵
雲龍數

の此功無益の
人をかりて
有益ふな
さゝわるべ戰
千万のくつ
どもこれふ主裏たる
者あらざれハ徒士あるべからず
よりて總諸勢とりまとめて
徳川家血統の者一人以權柄在城我有と
ちく一出陣せん如何さゝよ此時
あらざれハ徒ふ大義事ふもあるまじ
さて同廿日諸將より獵師の金雲上陣
なりしが敵の木ハ小村ふて負ん數

諏訪部新五郎

▲上陣せ
よ

つゞき

とゝ仮ふ函館のすぎ杉 ▣たり又巫
となり一番沙そちし 盤ようりの軟
市中いりとうり 左宮
遊も大ひの張ひ人 猫
猫ごと毛を取しより
毛より猫会い桜井
名ごふ山面をおせ
福山よりさし めし場合を
仮しふ生 親なきの子
あよまで 後名桜井を殺害し
ひそみ宮会そんて猫会を
残んとまる動ひなるを
ちき毛より猫会を石人
ことまる すこの悪大ねと
なりられよーきてして
松余ふ 函お村み

㊥の地
墓を築

き防禦む
もけん全な

り口
頭 一時
ふ隅
動を前
ふー
大ホ砲
を

数十

連発

弾丸雨の
如く又

もれば 砲発

堺内或 ハ墓訪
ふ村て 飛却途
叶お合
宝ふ
疎風

ふ 猫会の源ふ生で
猫会ひそみ
上陸ーる会をひそみ
猫会い毛ととて
勢ふん降雨の如し
ふ迫ー激山
安宝まの頭長る上
ふてーきをなーる
ど組撃ーて猫ふ
お原なり毛より
皮会い大江の敵
きをなー退き ×

ふ進ねー盤ん× 雪まー

つゞき

さて又六月廿日箱館の
城下へ入口の一戰ひ猛烈
なる事なれば箱山より攻め
大砲を發ち筆ちの煙烟み俱に
市中へ響き城中より砲發し
煙つよ込る事宮島の
城のやうにて丁ど大
砲を專やう砲聲
なり一又つゞき宇喜
一てハ強く響
くる事數百
なり
松平太郎
荒井郁之助

へいよ〳〵陸兵を備一軍機
筆て務の御通知を以て
仕度ハ卯の二十五日辰の
沖み動り其の明るを待ちしが
おゝくくて稍も
明渡りしが如く
なし〳〵

二十余人兵を構へつの
冥〳〵を結ひうし
敵又つゝを突き砲を放
たんとする所を一つ發
發を發せず放ハ
うろ〳〵砲を離れ生捕
捕虜を殺せ一放ハ
攻入たれば城のこみ破れたり
今い城中のやん〳〵
おこの事にて
把兵山を越へ或ハ市街を
はしり火を或ハ放て逃れ
去れりと云陽脳い
鍛冶み命りて探の環ひも
未せ一ば十四の
望ハ組松和泥

土民

肉飛といひ異なれ
う亀甲の様ありて
又ハ掛優ありて
ハ仏ふと見るまで
加よ
城ふ
おりけ
しか
強て
人なき
様遊
而砲
けり
只亀人の山

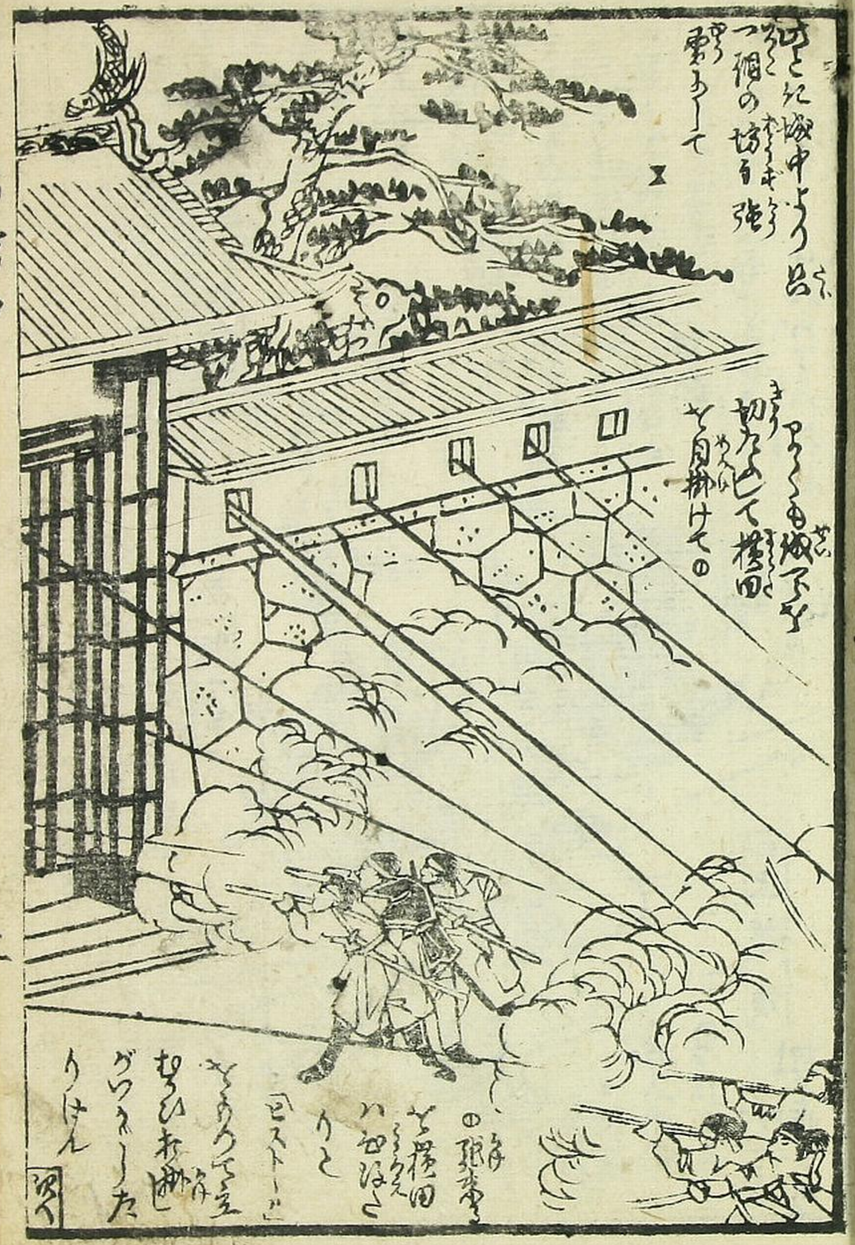
つぎ なりよろて登よ上陸し土くら越の松ふさとなひしづが新い墓所皆く当所に埋込墓石へ退きかくしとまつ叶目夕方より風暴く雪烈しく降り荒れ入風強く烟を起し墓所薄りたくなりしなり船中騒ぎ立ち墓守を招きうしが夜の十時限ふりて俄に探さづ遠く雪進く吹き付られ満潮へ乗り上舟び之を聞出さるを恐れ舟を陸へ引上ふるよ急ぎ楼へ泊り翌朝出帆せんとせしに暴風止まず船中の者ども上陸するとはば潮く言目

甲の巻

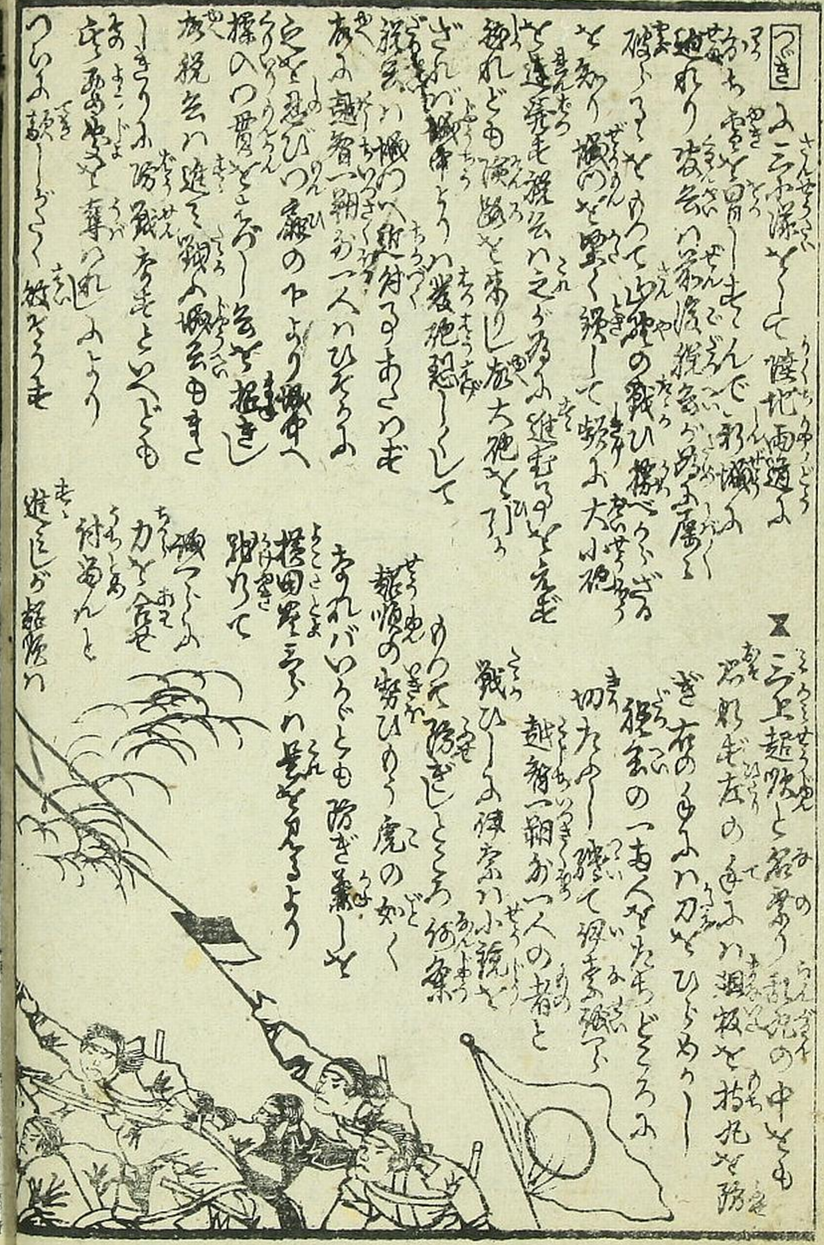
▲敵を戻せり
[illegible]軍速の船なよりて蒸気の機関
[illegible]
[illegible]
[illegible]

つづき

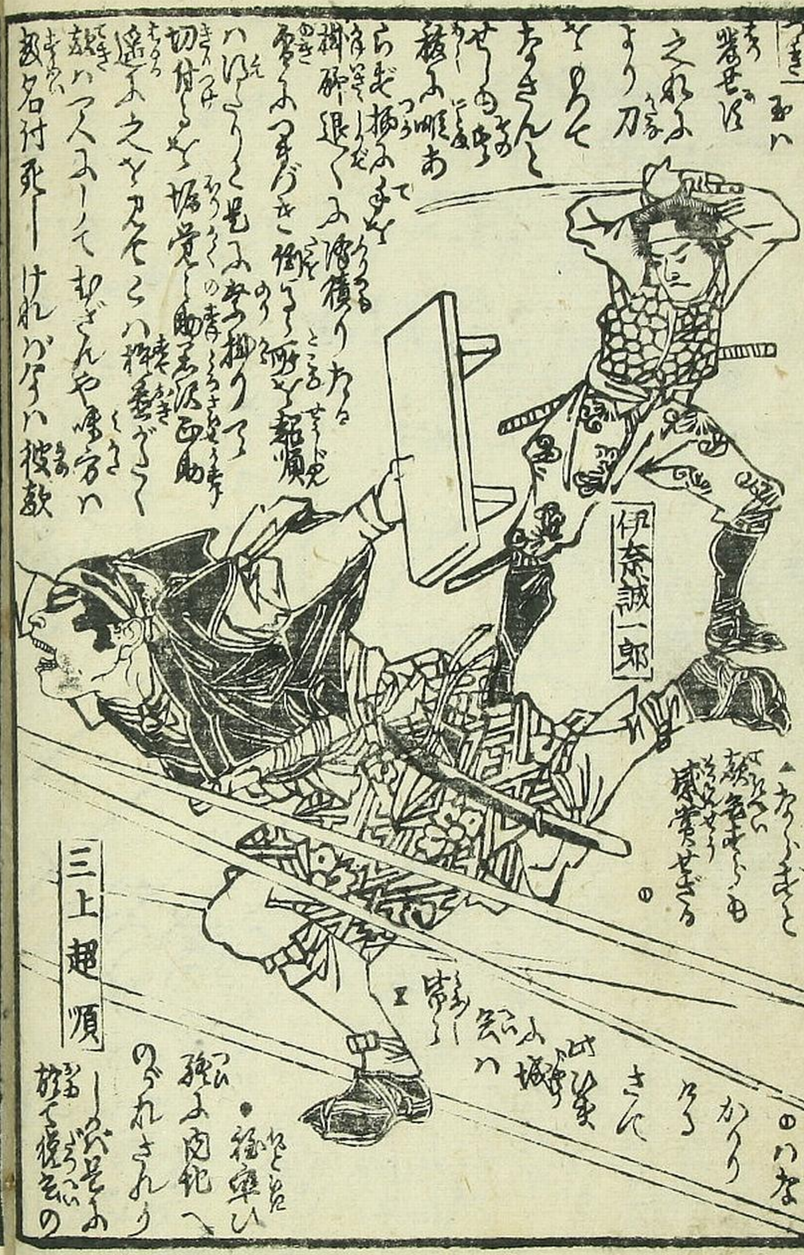
みこゝろ深くて陸地両道より
おのおの手分けして攻めよせ
ければ城中より呂
一個の切り強
勇あつて



切りこんで来る
を見掛けその

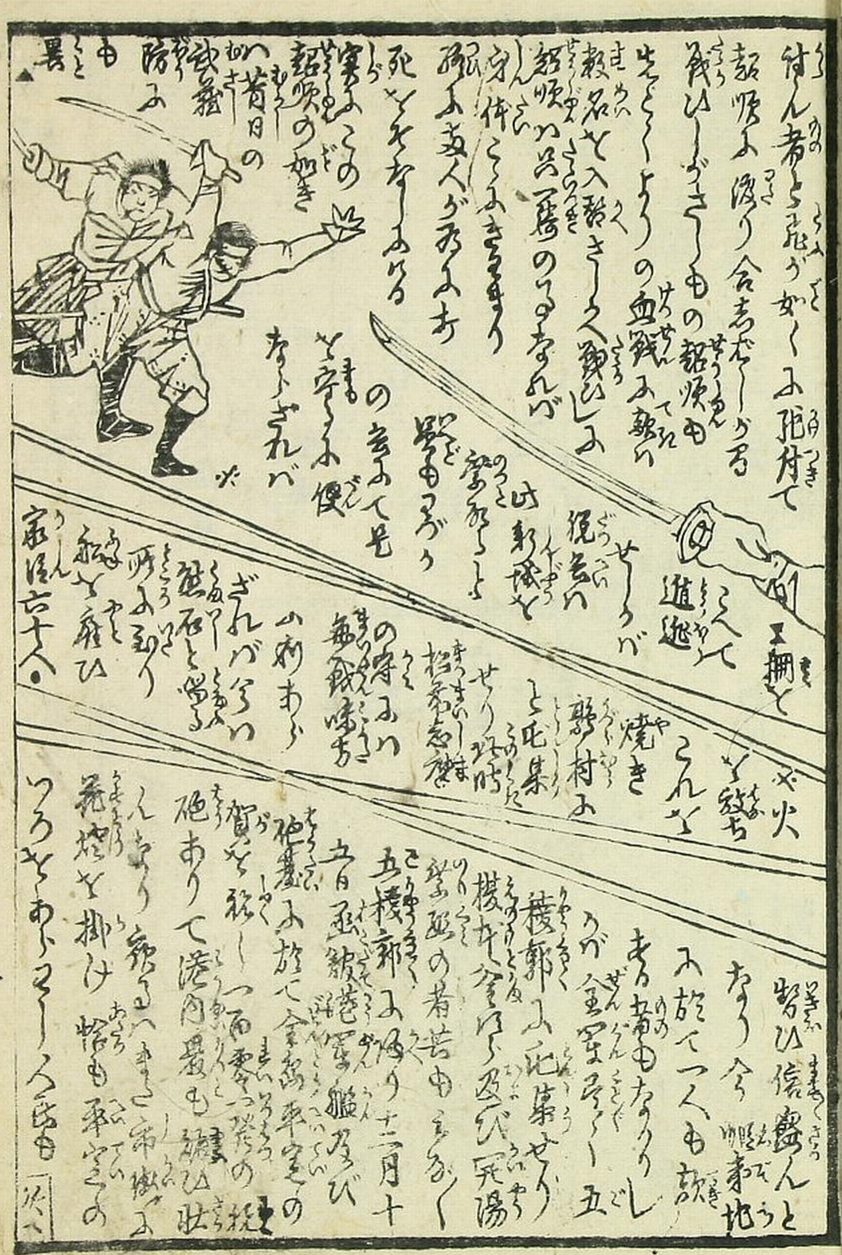


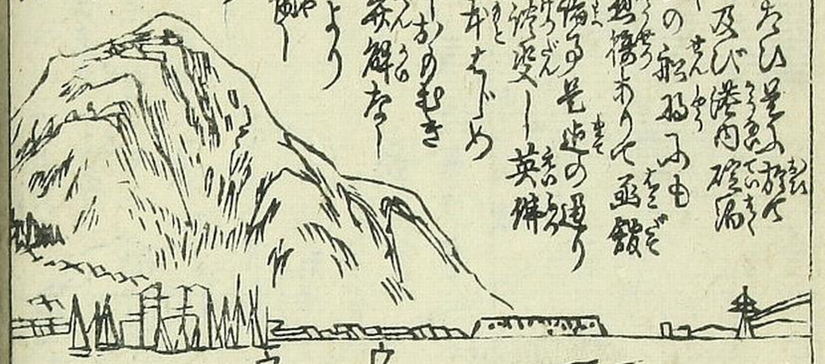
三上超吹と名乗り乱軍の中へも
かけ入るを左のきふいに退口を打ちかけ
ぎ右のきふいに刀をひらめかし
猛勢の一もくさんにたゝきちらみ
切たり〳〵跡にて聞きつけ
越前一朝かつ人の者と
戦ひしが後には小競り合
ゆうて防ぎしこゝろ
雑兵の如く
これバいうにも防ぎ兼しよう
是を見るより



伊奈誠一郎

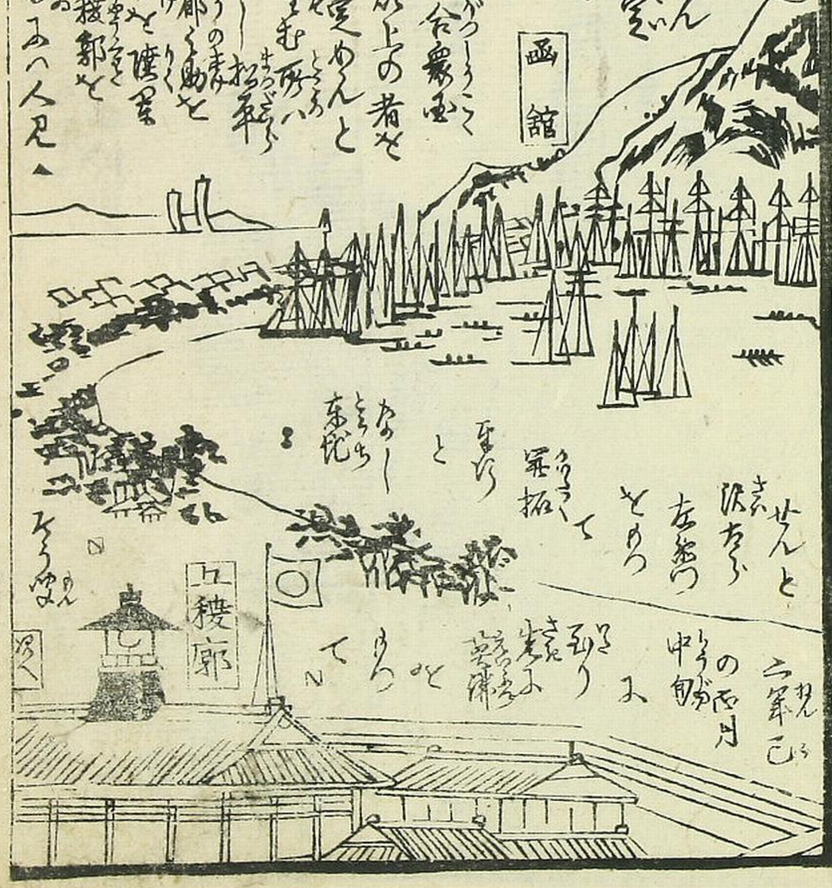
三上超順





▲榎本武揚氏松島甲鉄艦に乗組の時の写真

▲「モルテン」ころも所へ石碑の露人も骸骨となりて眠る



函舘

五稜廓

つぎ　廿一発砲廷より此報告書ありくうて西城なり

おりむき通牒ありくうて西城なり

とそ花代となさんと云そ

出さーむえふようて犹

名も武つの野ひ止そ

るそ待ふ唯おふ太砲

水兵酒徳の倦と投け

十三つへ悪く除砲の用意

こんと祖んと更

英人

定走時のよ二月

中旬なより暑て根会こう

八内地へ出ーる

探挟陥

佛人

来りて

田ふ去る

十日宿泊の

らんうん丸

運送

その巨魁とへし多の

船徳汽なせーがその

砲台の位置法やうお替きそ

そ乃そ甲そろと熟んとそ

きそ射け並気をとも

あるる亜米の旗を下し

我二隻亜米利加

号御船と敵合八隻両川

沖そ出帆十七八日の頃より南へ

宮古湾へ入津すべきよう

兼ての約束

榛本釜次郎

気ハ田天

悩乱する雄の業

そろて号を発ハん

たゐ四月廿日頃

函館湊出帆北蝦夷共一月

暴風より舎ひこうそう悲く

離散して呂田天のこ廿五日

掃除より宮古湾へ入りう敵艦の

横指を探りしより八そうともも

つゐーようを発ーる一へーそうをろて

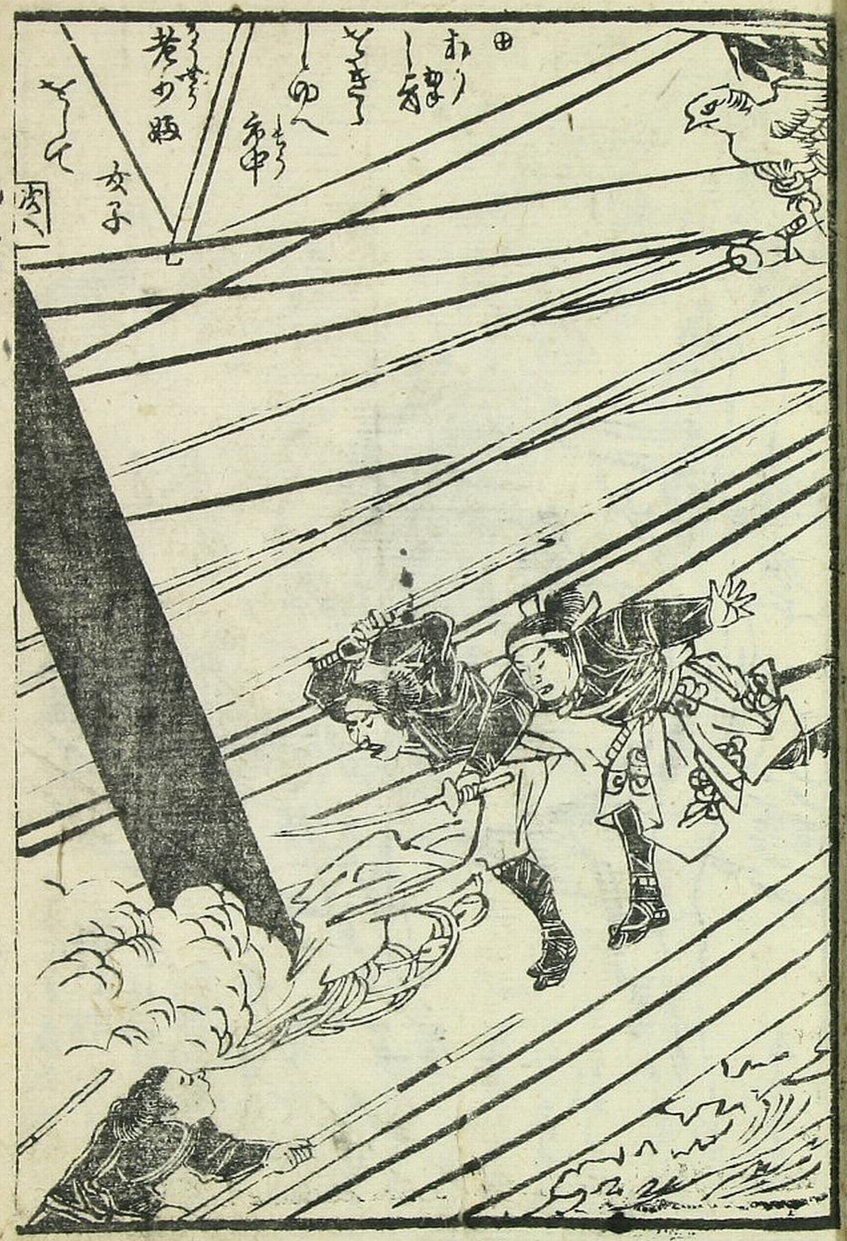
号を八幡宮の釜よひとしく祈りと云

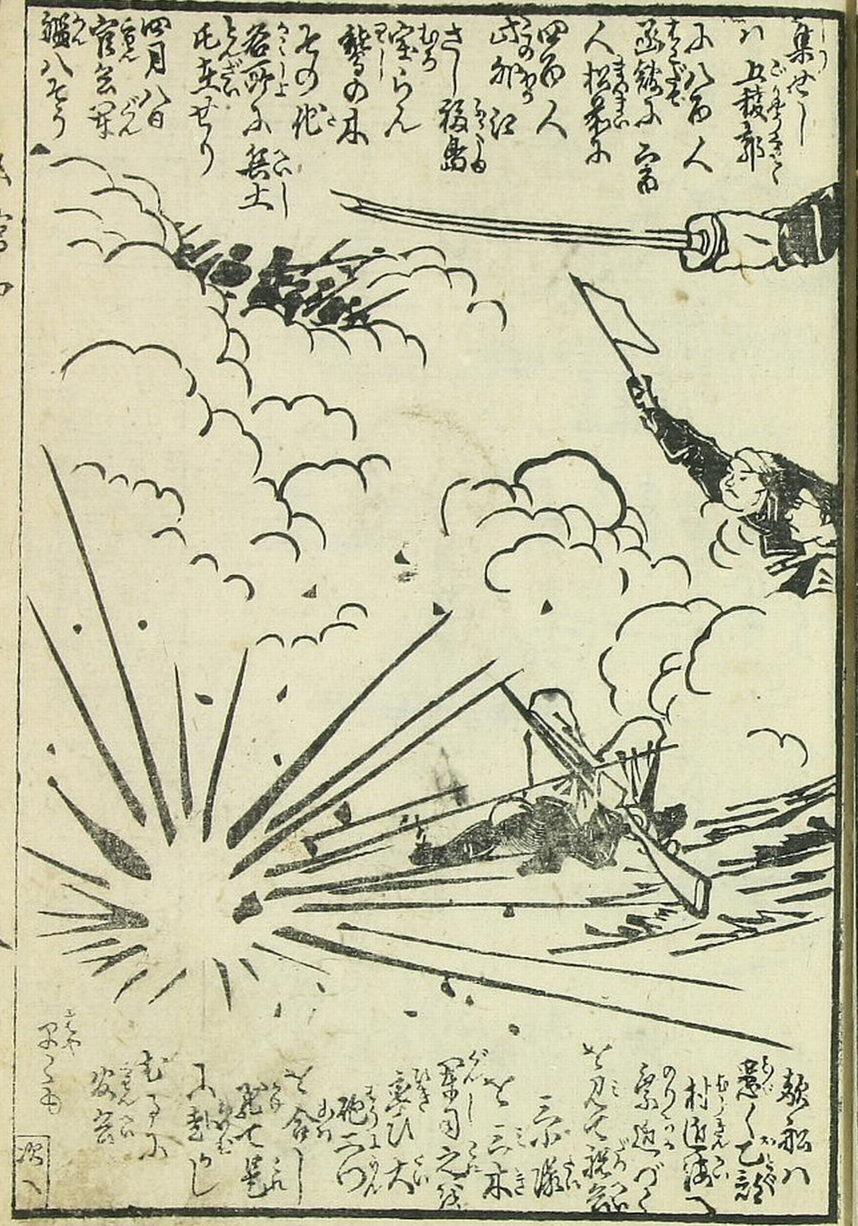
「つぎ」日の丸の旗を上ること僕大砲を發せしが甲秋の勁
おうて撰者
の陸軍甲
すうの紅板

松岡四郎次郎
沢太郎左衛門
荒井郁之助
永井玄蕃
小杉雅之助

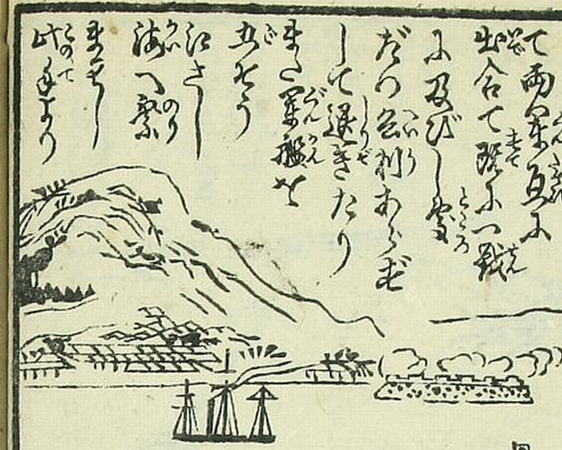
松平太郎
榎本釜次郎
大鳥圭介

人見勝太郎





つゞき上つゞきして



つぎ

おかふ
本国
のめん〳〵
会と
辛ひ
死せ
ず
より
捜さ
ず
発会い
種ふさん
らん
なりて
逃きる
二股
宮名
大ひふ
お祖ふ
ふなりて
上たり
山自
仏墓の
番四名
なりて
松茸へ。

松茸
ふてい
本古内
二股の
ひふ
ふろさ
ナお
猪利

なるよう
再び
江さ

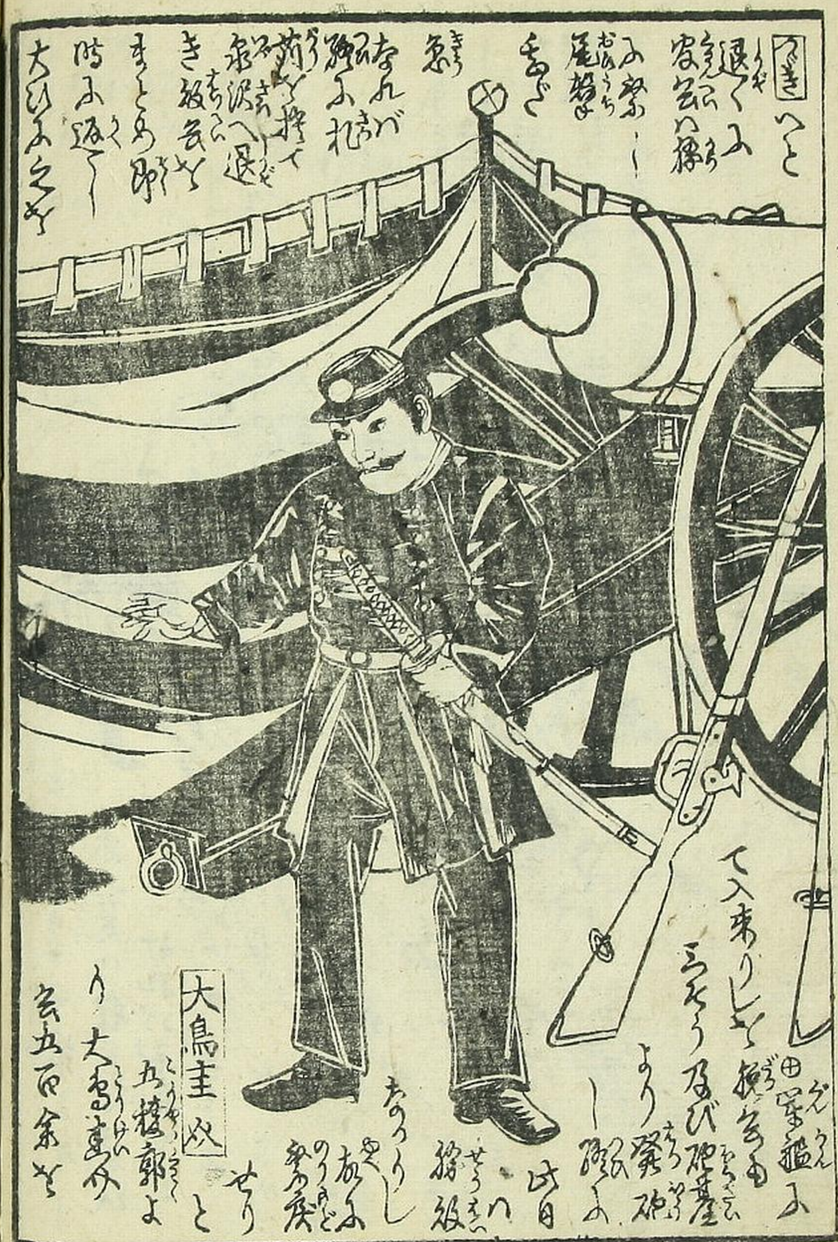
日十首夕より
逃家

本国十名江戸

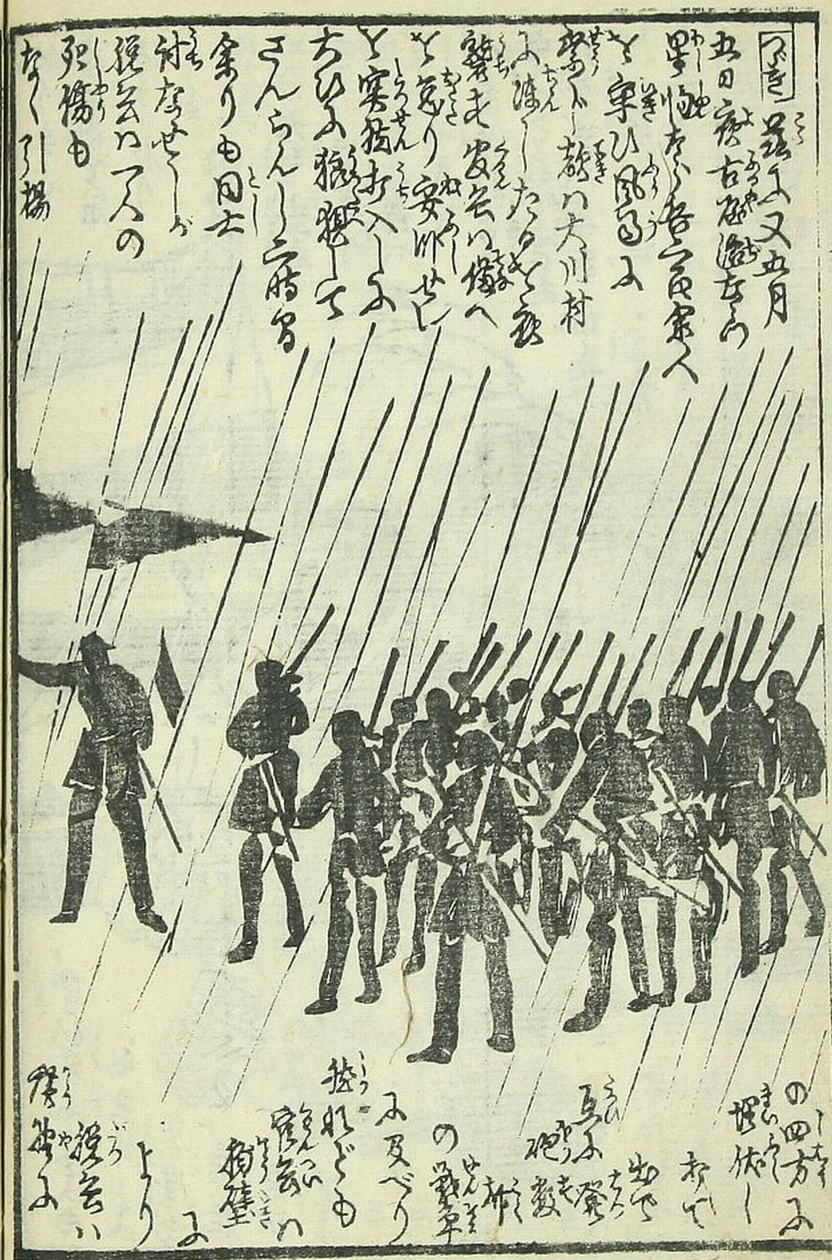
隅田了古閲

まで攻寄しを揃迎へ打取る
よし能登守
いふ海陸
より攻
給ひければ
より大敗軍と
なりよわりくみ
しを松永へ引揚
たり此時城覚しめ
忠円ひよう三井寺左近小林
又ひろの四名及び雑兵数名
り方さよふに知れぎとなりね
法名を慶二大律博了の討死を氏忠
吾古の討死数を知れば内十分の
一

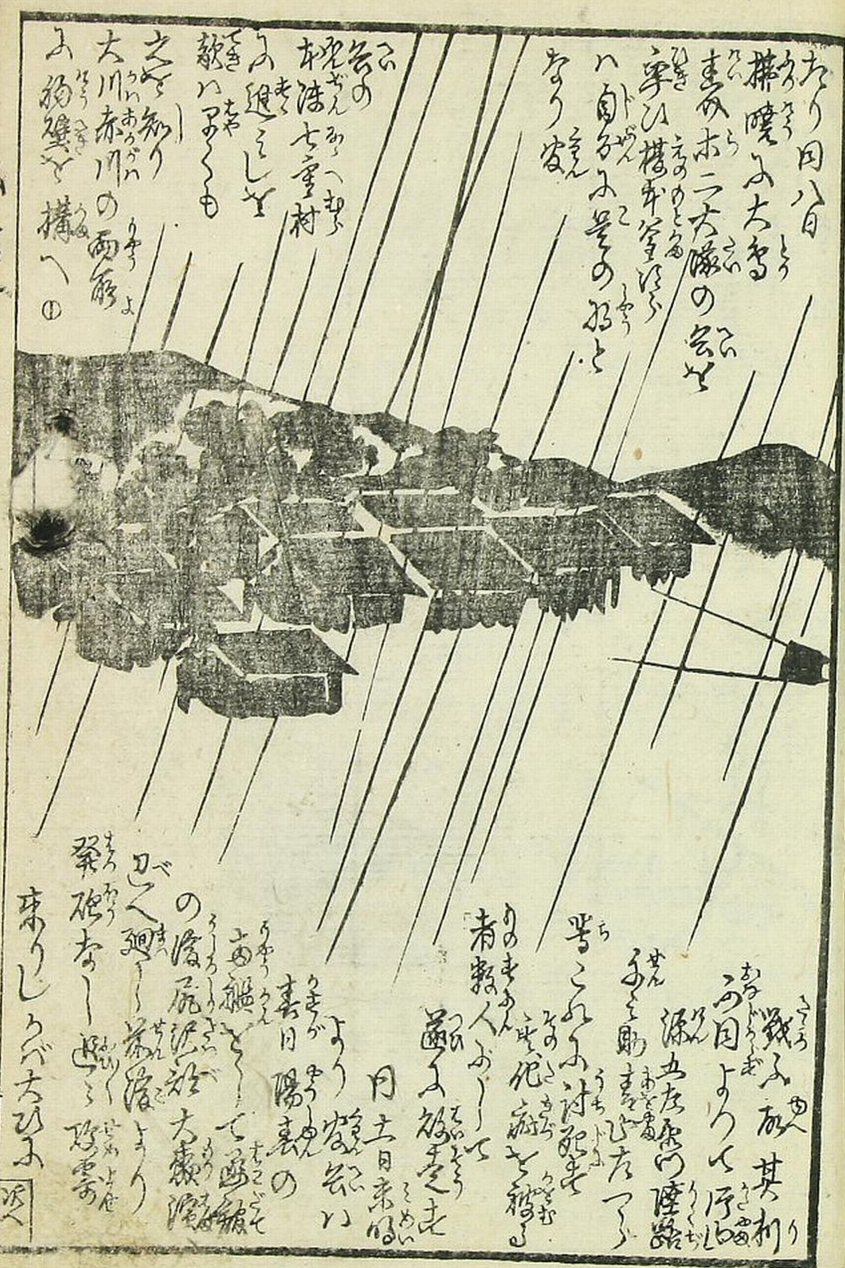
又曾家より雲霧よ
ぶ
木立の様を
けれバ
まつ
大吉



[illegible]こと
退くべし
容赦は
なれば
[illegible]
[illegible]
[illegible]



つぎ 又五月
五日夜古府邊女子の
野遊せんと各〻家〻
を窺ひ居る
ものゝ如く敵の大川村
へ渡らんとするを
警固の役人橋へ
と急ぎ安川せし
と突猛なれバ
ちりぢり狼狽て
さんらんし給ふ
ものも田土
討なせしが
從ふ人の
死傷も
なく引揚
ける
の四方より
押寄
おひ出
乘
砲發
數
本
の數挺
み及べり
拔れども
敵の
姿
見
えず
引揚
ける
み



たゞ田八百
構壁
まで大
まゝホニ大藏の
家ひ構中
へ自ゆ
ける
の
敵
討
なせ
しを
聞
敵
人
ぶして
逃
走
其
村
この日よりて
源五左衛門の隆路
ふたゝび助
まゐ
ひたつ
ふ討
なせ
しを
有
難
く
思
ふ
月十日
ようやく
雲
晴
陽
の
光
ひ
の
如
く
敵
の
死
骸
七
重
村
へ
送
り
大川赤川の兩
方へ
捨
置
ける
この
の
屍
沢
山
大
騒
動
べ
く
人
通
ひ
茶
店
より
翠
帳
あり
雲
霞
の
如
く
來
りしとぞ
大ひ

つづき 敵艦を追ひて
遙かに沖の方へ退きて行衛を
くらまし 沖合に
無人島あり 揚場より屯所を
港内ふかく懸引
艦より官兵を
とゞめ 戦ひけれど
墓所より出でし
よりも 盛んよ
砲撃せり 又七拿へ
(注略)
(注略)
(注略)

▲葬しく火
葉巻へ
あり込し

恐く
梱

図 石炭の雷一時に
ごときあり さま
忽ち全船破壊
(注略)
皆海中へ
溺死し
者 二十人
過ぎ
を

大川ぞこう 常ならぬ事
出来し 桔槹船
権現山の
商館の
墓所より

驚き
恐れ入りし
よう 客ぶ
の大波寄
汁液を討死する者
あれこれ 怪我
有永の軍艦
へ 合事 ▲

官軍軍監

高橋凌雲

桜本ノ使者

※けれバ病着も大ひに
よろこびたより筋くみ西郷
西郷の官医高橋凌雲
小野権之丞の両名より
桜本松平の侍へ私儀
の出面を遣すべし
桜本よりの返事ハ
再三歎願ニ及びしかし
四方面へ御ゆるなれバ
ひとより賛成そうのむね
あゝざんべ迷ふも私ごとく
ぐ〳〵ひとゞもさもたゝず
ざれバ彼是ハ角のあゝん
ほり武つのまい〳〵ふせ
ぐ〳〵

小野権之丞

※当学中若学いさ〳〵
海律学五冊二のまふ
ゆくべ若ひふ
ひ〳〵
島有と
痛情の
「トクトル止」より

※けれバ病着
永井玄
海律

高橋凌雲

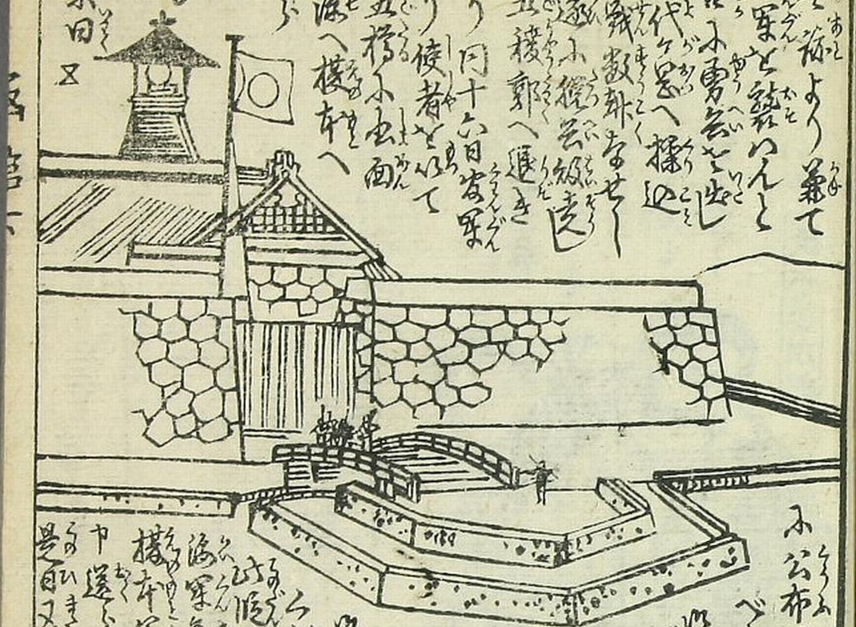
のむ
ちく
一ふく
ふび
馬永
桜本

より
出面ふそく
海律五冊
を遣ハれ
たる手紙
ふつく
別本二冊
ハ
桜本

※十月廿日の筆跡
表書ハ桜本
ハ
ハ
ハ

相馬主計
つゞき
富ぶまい
うぐんこゝもとにて別
ゝゝの思ひ出
横井の辞して
又明日軍つかまつり
こゝにて別れむより
同勢の残
しては
これる
永井玄蕃
も本意
ちかり
祝云い
必死
の
軍
とも
き
ざれいとて
蕃の
官軍田島圭蔵
川村録四郎
永井玄蕃

横山金次郎
猛き
皆
暑
逃
立
城



斎藤辰吉

桜本金次郎

荒井郁之助

大島圭介

010190514167

つゞき

今ぢうい　　中天誅を行ふの
云君そのさ　　これより宮前
こと〳〵〵　　階の前へ出すゞ
日頃みゝ舎也　　と報知せんが
これと宮雪よ　　為なり各〻
泡〳〵つてくる〳〵
涙ぐましひ
さめ〴〵と巫鈸
みいろくの五三日
をこそ後年天
墓所の陰参の者
と思ふ津駅
弘茶みやげ
きんしん
して　中

大鳥圭介

松平太郎

榛沢金次郎

荒井郁之助

明治十五年一月十四日　京橋畳町十七番地　編集人　岡　大次郎
下谷花町二丁目九番地　出版人　小森伊太郎
御届